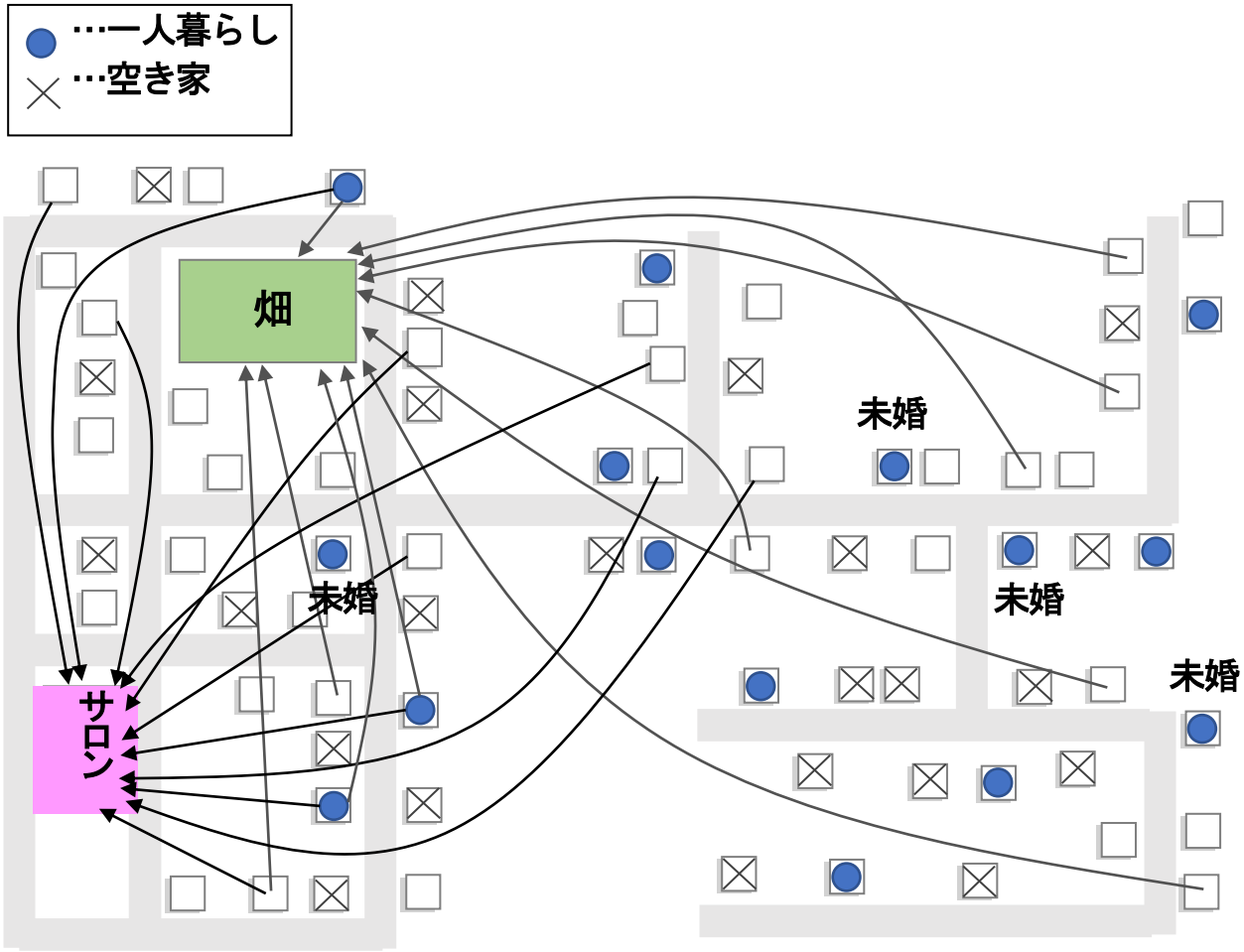
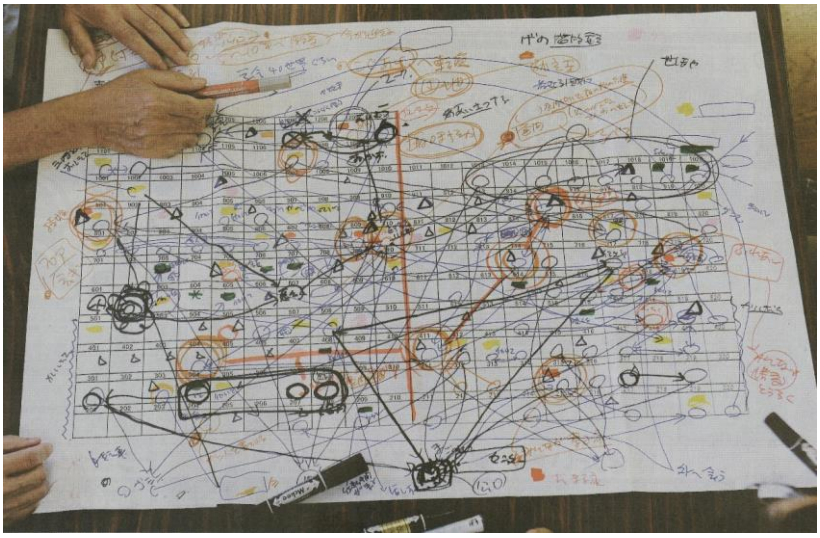
支え合いマップづくり入門



住民流福祉総合研究所

木原孝久

読売新聞



■本書の最重要ポイントを３つ、スローガンで示してみました。

❶ご近所での
❷ご近所さんによる
❸ご近所さんのための
支え合いマップづくり

■上のスローガンは、どんなことを言おうとしているのか。

❶「ご近所の」は、マップづくりは「ご近所」という小さな圏域で行うということ。
　数百世帯の町内で作るのではない、ということ。

❷「ご近所さんによる」は、マップづくりの主役はご近所さんであるということ。関係者はバックアップ役に回る。

❸「ご近所さんのための」は、マップから出てきた課題は、ご近所さんが中心になって取り組む、ということ。

＜目次＞

1.支え合いマップづくりとは？／４

2.なぜ「ご近所」にこだわるのか／５

3.ご近所の流儀とは？／７

4.世話焼きさん主体のマップ作り／９

5.マップ作りで知っておくべきこと／１０

6.住宅地図への記入の仕方／１１

7.問題と解決策を同時に探そう　／１２

8.難関は「解決の手がかり探し」／１５

9.問題は「ご近所」で解決する／１７

10.課題を圏域ごとに「振り分け」／１８

11.「気になる対象」別・聴取の要点／１９

12.当事者は地域で豊かに生きているか？／２１

13.ご近所福祉を誰が支援する？／２３

14.あなたの福祉観が問われる／２４

15.マップ作りの着地点はどこ？／２５

16.マップでご近所を設計する／２６

17.取り組み課題の整理／３１

1.支え合いマップづくりとは？

❶ご近所で誰もが安全かつ心豊かに生きられるよう、❷ご近所さんが中心になって、❸ご近所内のふれあい助け合いの実態を住宅地図に乗せ、❹より良きご近所への取り組み課題を抽出し、❺その課題にご近所さん主体で取り組むこと。

❶は、マップづくりの目的。「ご近所」ですべての人が安全に、かつ心豊かに生きられることで、そのための課題をマップで抽出するのです。

❷マップづくりはご近所さんが中心になって実施します。むろん関係者が支援しますが。

❸具体的にはご近所内のふれあいや助け合いの実態を住宅地図に記入していくことで、特に人々の関わり合いを線で結んでいくのが大きな特徴です。

❹その中で、ふれあいや支援が欠けている人が見えてきます。どのように見守りや支援をしたらいいのかも、当事者やご近所さんの行動をヒントにして考えます。

❺出てきた課題にご近所さんを中心に取り組んで初めて、マップづくりは完了となります。

■現状とどこが異なるのか。現状の何が問題なのか？

❶「安全」の問題は誰もが関心を持っているのでいいのですが、「どんなに要援護でもその人らしく生きられるように」ということまでが解決されるべき福祉課題であるということが、まだあまり理解されていません。

❷今は関係者がマップ作りを行い、ご近所さんに聴取する形ですが、ご近所さん主体に変えていくことが求められます。

❸マップ作りで支援の必要な人や住民同士の関わり合いを可視化するだけでなく、問題の解決策もまたご近所さんの行動をヒントに考えるという点が不足しています。

❺今はマップができれば終了と考える人が多いのですが、出てきた課題に取り組んで初めて意味が出てくるのです。しかもご近所さん自身が取り組むという点も重要です。

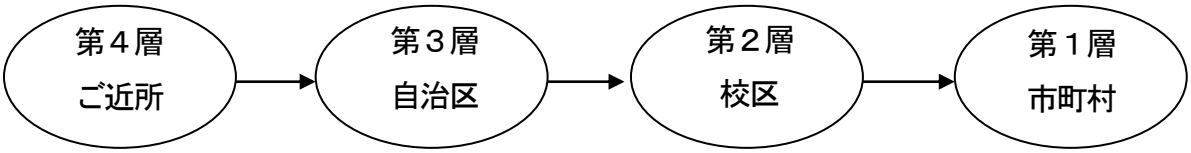
2.なぜ「ご近所」にこだわるのか

この改訂版では、マップ作りの場をご近所に設定しています。しかもその目的はご近所福祉の充実であり、マップづくりの主体もご近所さんとしています。なぜそんなにご近所にこだわるのか。

それを説明する前に、地域がどのような圏域で構成されているかを見てみましょう。

⑴第４層「ご近所」があった！

下の図を見てください。地域は３つの層でできていると言われます。第１層が市町村で数万世帯、第２層が校区で数千世帯、第３層が自治区（町内）で数百世帯。私共ではその後に第４層「ご近所」があることを発見しました。約５０世帯の小さな圏域です。



⑵「ご近所」の特徴とは？

ご近所にはどういう特徴があるのか。それほど注目すべき利点があるのか。

❶「顔が見える」唯一の圏域。
❷「助け合い」ができる唯一の圏域。
❸当事者はここでニーズを発信中。
❹当事者は第３層までは行けない。
❺ここに世話焼きさんがいる。
❻「ご近所流」で助け合い

❶いわゆる「顔が見える」範囲が５０世帯なのです。古代の日本で国郡里という圏域が設定されていましたが、この中の「里」は５０世帯でした。日本の社会は５０世帯を基本単位としてできているのです。
❷「顔が見える」から助け合いができるのです。他の層で助け合いは無理です。

❸当事者（要援護者・要介護者）はご近所にいて、そこでニーズを発信しています。
第１層や２層にいても、当事者の声は聞こえません。ご近所まで来れば聞こえるのです
❹当事者（要援護者）は第４層が生活圏域で、ここから出るのは大変です。老人クラブやサロンなどはみんな、第３層でやっていますが、当事者は行けないのです。
❺地域では世話焼きさんが要援護者のお世話をしていますが、第３層は広すぎて活動できません。対象者がよく見えるご近所で活躍しています。だからご近所は人材の宝庫と言えましょう。
❻この４層だけは、ご近所さんが独特の流儀で助け合いをしています。

⑶なぜご近所さん主体なのか？

❶助け合いのまち作りが国家的命題に。
❷助け合いはご近所で実践されていた。
❸ならば課題解決もご近所さんの手で。
❹つまりご近所福祉はご近所さん主役で。
❺ご近所さんの独特の流儀を尊重しよう。
❻ご近所を基点に地域福祉づくりへ。

❶介護保険が行き詰まり、国も国民の参加を求め始めました。「共生社会」作りと言いますが、要するに助け合いのまちづくりをしようということです。
❷その助け合いはご近所でのみ行われていることがわかりました。それ以上大きな圏域ではお互いの顔が見えず、助け合いはできないのです。
❸となると、マップで出てきた取り組み課題も、ご近所さんたちの助け合いで担ってもらうのが筋です。
❹つまり、ご近所福祉はご近所さん主体で進めていくということです。
❺ご近所さんには独特の助け合いの流儀があります。ご近所さんに主役として活躍してもらうとすれば、その流儀を最大限尊重しなければなりません。
❻ご近所の主体性を大事にするということは、福祉関係者が主導して第１層から指示をするといったやり方を変えなければなりません。これからはむしろご近所から地域の福祉を組み立てるといった、新しいあり方を模索していく必要があります。

3.ご近所の流儀とは？

４つの層の中で、ご近所だけは、いろいろな意味で異なっています。他の３つの層は関係者の流儀で福祉が営まれていますが、ご近所だけは住民の流儀で助け合いが行われています。これを尊重しないと、ご近所さんのやる気を失わせてしまいます。絶対に守るべきご近所での助け合いのルールとは？

❶一対一の助け合い。対象をまとめない。
❷相性の合う者同士で。
❸双方向。一方的サービスは厳禁。
❹天性主義。世話焼きさんが活躍。
❺当事者主導。本人の側から考える。
❻水面下の活動。「見えない活動」
❼私的・個人的な関係。

❶活動やサービスというと、対象者を要介護度や障害の種類などで分けて、まとめて提供することになりますが、ご近所では厳禁です。あくまで一対一の関係で助け合いをします。

❷相性が合わないと、日常的な助け合いはできません。誰でもいいというわけにはいかないのです。

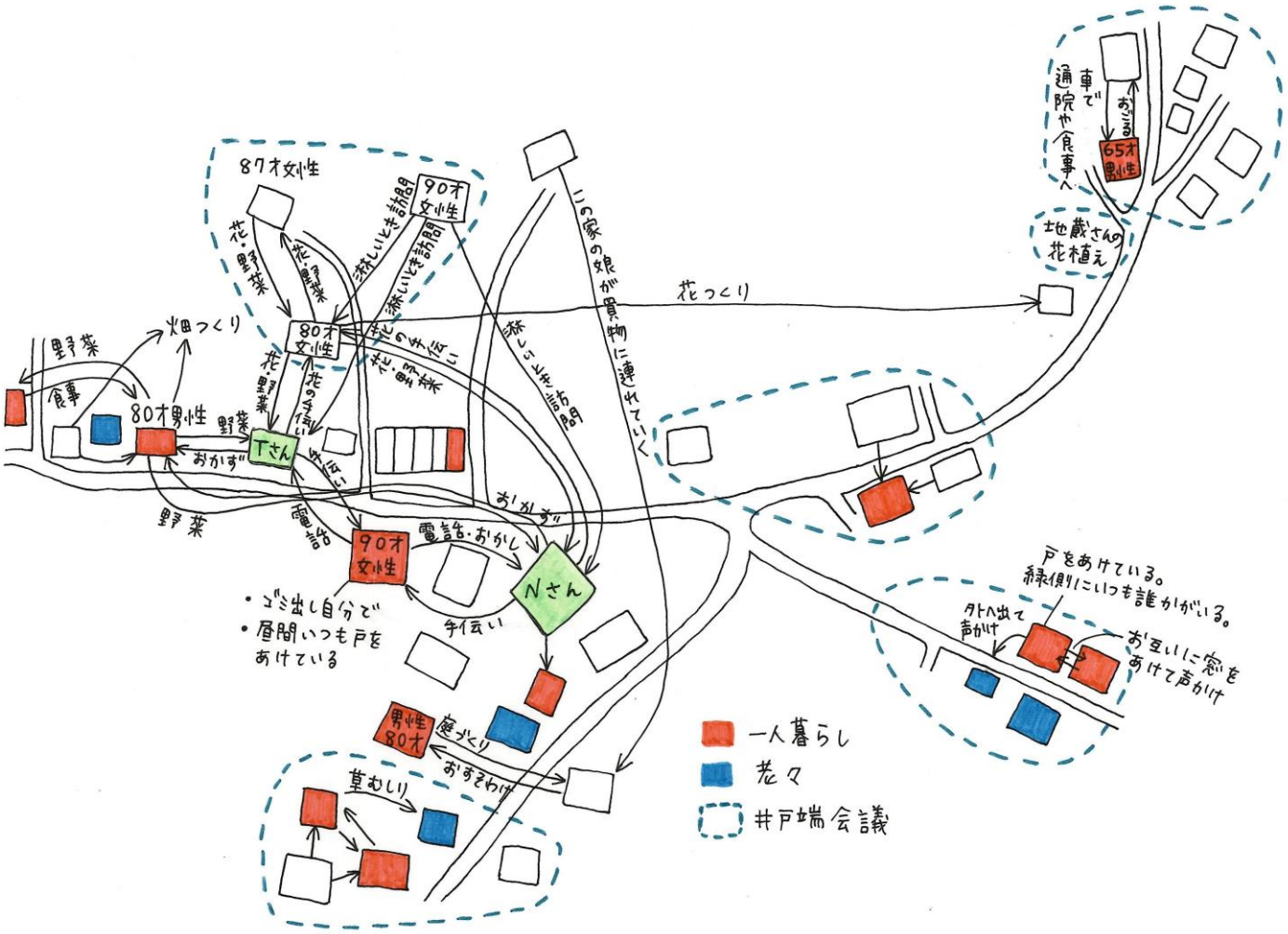
❸住民は一方的なやり取りを嫌います。必ずお返しをしないと困るのです。

❹そこで世話焼きさんの出番になります。住民は肩書とか研修を受けたから福祉活動を担えるとは思っていません。ご近所では、困っている人を助ける天性の資質（実力）のある人が活躍しています。

❺当事者が支援者を選び、してほしいことをお願いするというあり方が、ご近所ではよく見られます。当事者の自尊心を傷つけない支援のあり方を求めた結果、このような方法になったのでしょう。

❻今と同じ発想ですが、助けられた人の自尊心を守るために、担い手はできる限り、相手がいかにも「助けてもらった」と感じないように配慮します。また周りの人の目につかないように水面下で活動します。

❼民生委員の訪問を拒否する人は、受け入れることを社会的な義務とは思っていないからでしょう。ここは私の生活の場であり、私的な営みならば、訪問者は私が選ぶ権利があるということです。



＜ご近所の流儀－上のマップの場合＞

❶２人世話焼きさんが、このご近所全体を仕切っています。

❷一人暮らし高齢者（橙色）が隣同士で助け合っている（下部の点線で囲んだ部分）。

❸一人暮らし高齢者が、自分の身の安全を守るために「外へ出て声掛け」や「戸を開けている」。

❹数名が相性の合う人同士でおすそ分けとお返し（大抵は線が双方向になっている）。

❺一対一で送迎サービスもなされている（中央部の縦の線と最右上・これも双方向）

4.世話焼きさん主体のマップ作り

マップづくりとその後の取り組みは世話焼きさんに主導してもらうのがベストです。

⑴世話焼きさんがマップに関わる有利点

マップづくりから取り組み課題の実践まで、世話焼きさんを主体に進めていくことをお勧めします。マップづくりから実践までの過程をスムーズに進めるために、世話焼きさんは最も適した人材なのです。

①ご近所の状況をよく知っているので、マップづくりではたくさんの情報を出してもらえる。

②また、ご近所の問題に既に関わっているので、出てきた課題にも容易に取り組んでもらえる。

③マップづくりも世話焼きさんが積極的に参加してくれるので、容易に開始できる。

⑵世話焼きさんとはどんな人？

❶困っている人を見つけると気になって、関わらずにはいられないという人。

❷即座に動き出す。

要援護者は問題を早く解決したいと思っている。だから「即刻動く」人は有難いのだ。

❸要援護者に見込まれる。

前項のように即刻動いてくれるから、要援護者に見込まれる。

❹嫌いな人がいない。

好き嫌いで人を区別しない。だから、誰でも助けてしまう。

❺世話焼きさんと世話役さんは違う

「世話役」と言われる人は、いろいろな役を持っている人。一方「世話焼き」さんは、人の面倒を見るのが好きな人で、どちらかといえば役は持ちたがらない。

❻天性の資質で、養成には馴染まない

世話焼きさんはよく、「困っている人がいると、気になって食べ物がのどを通らない」という。こういう人を教育によって養成することはできない。

⑶「ご近所ボランティア」の誕生

ご近所活動に専心してもらう新しいボランティアの登場です。その特徴は、

①ご近所内に在住の世話焼きさん。

②専らご近所内の福祉課題に取り組む。

③ご近所内の住人が取り組むのを支援することも含めて、ご近所福祉の「推進」を実践する。

④常に支え合いマップを携帯して、ご近所内の課題を抽出し、それに取り組む。

⑤これは世話焼きさんの自主的（ボランタリー）な活動なので、他の組織から指示を受けたりすることはありません。町内会や関係機関は後方支援役を担います。

5.マップ作りで知っておくべきこと

マップ作りで最低限知っておくべきことは以下のとおりです。

⑴マップづくりの場所の選定

①マップは、およそ５０世帯の「ご近所」ごとにつくる。

②三百世帯の自治会なら、６つぐらいに分けて、それぞれの「ご近所」ごとにつくる。

⑵マップづくりへの参加者

①あくまでご近所内に在住の人に限る。

②目安は、約１０世帯の小ご近所から１人ずつ、計５人を集める。できれば世話焼きさん。

③ご近所内の助け合いの実態をよく知っている人を選ぶ。女性の方が断然有利。

④オブザーバー役、支援役として、自治会や民生委員、社会福祉協議会、地域包括支援センターなども。

⑶マップづくりの進行

①司会進行役と記入役を決める。できるかぎりご近所さんが担う。

②記入するのは、意味のある線、意味のある情報に限る。

③最後に取り組み課題をまとめる。課題が出てくるように参加者が一致協力する。

⑷用意する物

①住宅地図を模造紙大に拡大したものを用意する。

②太いマジックペンで書く。ボールペン等で小さく書くのは避ける。

③付箋は使わず、直接書き込む。

④丸いシールを数色用意する。

⑸マップ作りに要する時間

①１回あたり１時間半が適当。

②その後に「取り組み課題」を整理する時間をとる。

③別の機会に、１回目に情報が出なかったテーマを取り上げる。

⑹プライバシーの問題

①マップ作りの場で出る情報はご近所の人が既に知っていること。井戸端会議の延長。

②民生委員や自治会長は、行政からもらった情報は持ち込まない。

③出来上がったマップとその情報はご近所内に閉じ込める。ご近所外には出さない。

④助け合いをするにはご近所内のあらゆる福祉情報がオープンにならねばならない。

6.住宅地図への記入の仕方

人の動きを矢印で示します。要援護者とその人に関わっている隣人を結ぶ線や、ご近所の人が集まる場など、助け合いに関わる線を記入します。

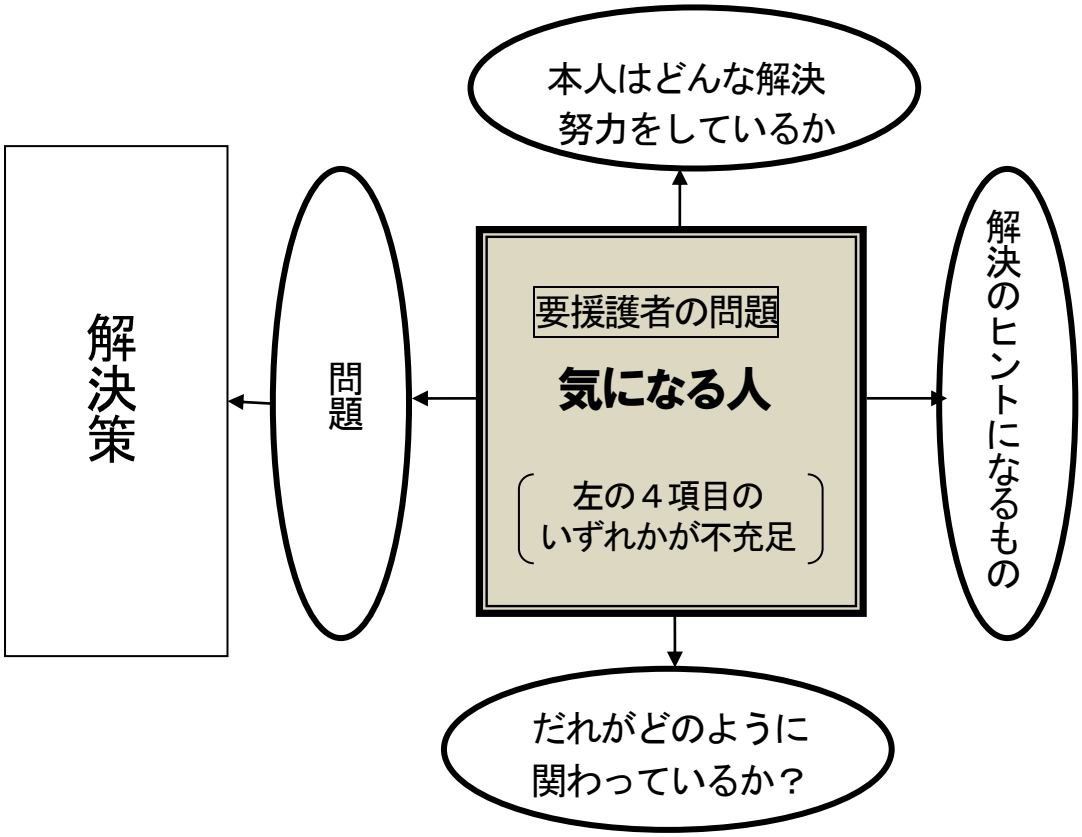
マップ作りで、何を記入すべきか、何は記入すべきでないという区分けの基準はありません。マップ作りの目的に合ったものだけを厳選して載せます。この線は後で取り組み課題を見つけるときに重要だと思えば記録します。その人の身内や親せきの名前などを片っ端から記入する人がいますが、その情報だけでマップの紙面は埋まってしまいます。反対に、ほとんど何も記入しない人もいます。頭で覚えているから大丈夫と思っているようですが、人間はそのほとんどを忘れてしまうと考えた方がいいのです。

7.問題と解決策を同時に探そう

問題は①「気になる人」と②「気になること」。前者は要援護者で、後者は住民が住みづらさを感じている問題を取り上げます。そして同時に解決策も探します。

⑴「気になる人」探しと解決策探し

４つの課題があります。①安全が守られているか。②困り事が解決されているか。③必要な介護やケアがなされているか。④要援護でも豊かな生活ができているか。



＜気になる人の問題解決策さがし＞

①本人はどんな解決努力をしているか。

②周りは当事者にどう関わっているか。

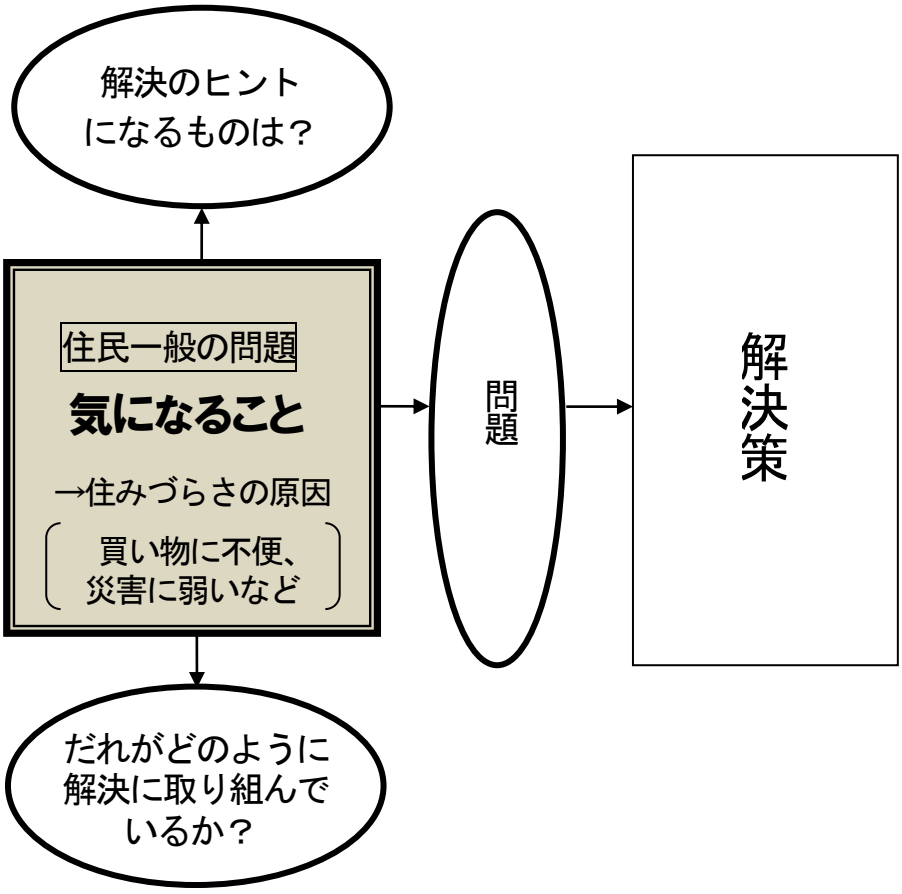
③解決のヒントになりそうな人や活動は。

例えば、こんなふうに記入。❶が本人の解決努力と、周りの関わり、そして解決のヒントになる人や活動。❷が解決策です。

地域の気になる人	❶本人の努力。周りの支援。	❷解決策
一人暮らしの高齢女性。問題は「買い物が不便」。	Ｉ子さんの夫が元タクシー運転手。以前一度運んであげたことがある。他にもご近所に送迎をしてくれる人がいそう。	Ｉ子さんの夫を中心にご近所内の有志で送迎チーム。

⑵「気になること」探しと解決策探し

「気になる」理由は２つあります。１つは、実際に住みづらい原因が存在する場合（買い物に不便など)。もう１つは、ご近所で住民は豊かに生きているかです。



＜「気になること」の問題解決策の探し方＞

①住民が取っている解決行動。

②解決のヒントになりそうな人や活動。

例えばこんなふうに記入。❶が住民が取っていた対策行動と解決のヒントになりそうな人や行動。❷が解決策です。

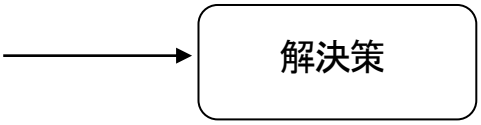
地域の気になること	①住民が取っていた対策行動	②解決策
旧住民と新住民（アパートの住民）の交流がない。新住民は自治会にも加入しないので自治会長は困っている。	個々レベルでは交流していることがわかった。旧住民のＡさん（男性）は、アパートの３軒の人に畑を貸していた。同じく旧住民のＢさん（一人暮らし女性）は、アパートの３軒の人と犬の散歩友だちになっていた。	畑の貸し借りをしている人たちと畑の持ち主でふれあいイベント。同じく犬の散歩をしている人たちで交流イベント。自治会長も子ども会で新住民と交流していたことに気づいた。

8.難関は「解決の手がかり探し」

マップ作りで最も重要で難しいのは、解決の手がかり探しです。見つかった問題を解決に導くための手がかりを、マップからどう探し出すか。下の事例は、あるご近所でのマップ作りの結果出てきた問題と手がかりです。

問題	→	解決の手がかり	→

⑴坂道で休憩しないと店まで行けない人がいる	❶自宅で休憩させている世話焼きさんがいた。 ❷雨の日は車で送ってあげているようだ。
⑵コンビニ弁当ばかりの一人暮らし男性がいる	❶ご近所に食生活改善推進員がいた。 ❷彼らが草刈りをしている。お礼が必要。
⑶認知症の母と娘。引きこもり	❶娘と会った時は声をかけている。 ❷母は以前、踊りのお師匠さんだった。
⑷誰でも参加できる集りがない	❶井戸端会議はあるが相性の合う人同士。 ❷使われていないが、町の集会所があった。
⑸一人暮し男性が行事に参加していない	❶以前この地で麻雀が盛んだった。 ❷多人数用のコミュニケーション麻雀も。
⑹「迷惑な男性」がいる	❶誰かと話をしたいのかも。
⑺寝たきりで一人暮らしの男性	❶災害時は避難支援をしようと協議していた。 ❷すぐ近くに福祉避難所がある。
⑻精神障害が心配な一人暮らし男性	❶近くの元保健師が相談に乗っていた。



⑴実践者を中心に移送者を確保。チーム作り

⑵彼らへのお礼としておかずの差し入れ。

⑶教え子に踊りの指導をしてもらう。

⑷集会所でふれあいサロンを開く。

⑸麻雀を復活させる。コミュニケーション麻雀も。

⑹新しく誕生するサロンの仲間に入れる。

⑺災害時の避難支援で個別のケース会議。
避難所でのお世話隊も結成。

⑻元保健師を中心に精神障害者の見守り体制作り。

9.問題は「ご近所」で解決する

ここで大事なことがあります。問題解決はご近所で、ということです。

⑴問題を上層へ持ち出さない

私たちがめざすのは、「誰もが豊かに生きられる」ご近所作り。そのためには、ご近所の問題はご近所で解決できるよう努力する必要があるのです。そうすることで「ご近所力」が強化され、ご近所の連帯も強まるのです。

⑵「ご近所力」強化のための４原則

ご近所福祉を行う場合、以下の４原則を頭に入れて行動する必要があります。

①ご近所で対処（課題を上層に持って行かず、ご近所で解決する）

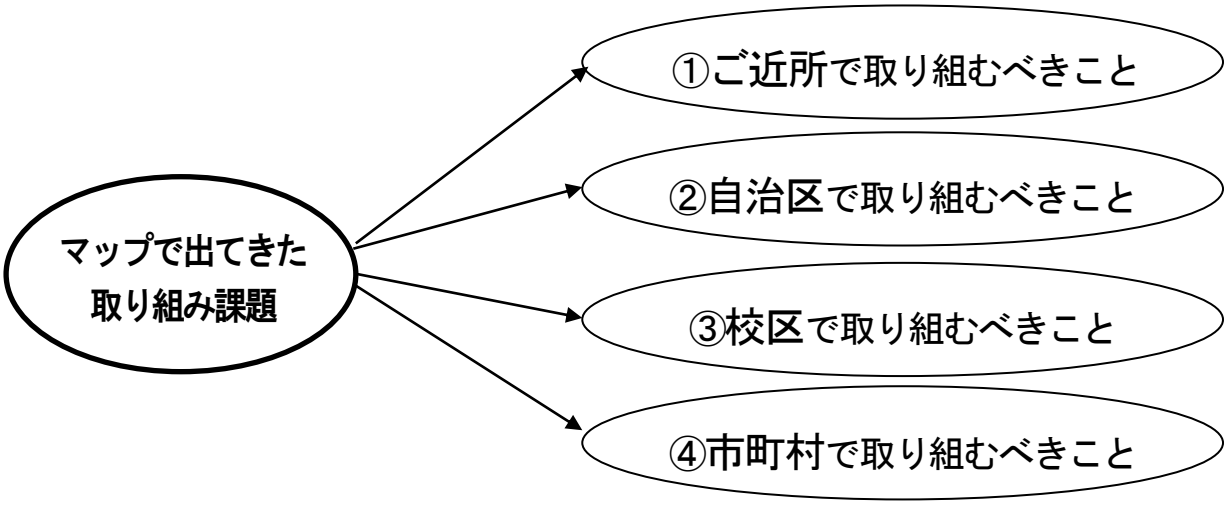
②ご近所に結集（関係者はご近所の問題解決でご近所に結集する）

③ご近所で調達（できる限りご近所から資源を発掘し、活用する）

④ご近所で連携（上層が受け持つ場合もご近所さんと一緒に解決する）

10.課題を圏域ごとに「振り分け」

「取り組み課題」が出たら、そのすべてをご近所で担わなければならないということはありません。そこで４つの層があるという事実を生かせばいいのです。それぞれの層の得意な部分があるのですから、それを生かし合えばいいのです。一言で言えば、マップで出てきた取り組み課題を圏域ごとに割り振るのです。ただし前項の四原則は守らねばなりません。



下の表は、「送迎ボランティア」の取り組みを、４つの層に割り振ったらどういう活動がありうるかを整理したものです。上層へ行くほど、高度な機能、または大所高所からの取り組みが求められることになります。

ご近所	①ご近所内で元タクシー運転手など運転に慣れた人を探す。 ②彼等がご近所内の人の送迎に協力してくれるかどうかを確認する。 ③一方で、送迎を頼みたい人を、ご近所内の口コミで探す。本人が今までどうしていたのか、その人なりの送迎協力者を確保していたかも聴き出す。
自治区	①町内会が中心になって、町内全体の送迎の人材を探す。 ②その中で、ご近所を越えて協力する気のある人を探す。 ③自治区全体で、同様の送迎チームが作れるか検討する。 ④事故対応をどうするかを自治区として検討し、ご近所での活動に備える。
校区	①買い物支援で、他にどういう方法があるかを調べる。 ②現在どういう方法が採用されているかを、ご近所や自治区ごとに調査依頼。 ②結果を自治区や各ご近所に情報提供して、移送だけに偏らないようにする。
市町村	①市全域での買い物支援の実態を調べ、多様な選択肢を各自治区に情報提供。②送迎の助け合いについての、過去の、または他地区で起きた問題を調べて、対策も含めて各ご近所に情報提供する。 ③上記の情報や買い物支援のマニュアルを作成し、各自治区に提供する。

11.「気になる対象」別・聴取の要点

「気になる人」をマップから探し出すための目安として、以下のような対象と生活状況を参考にしてください。

⑴一人暮らし高齢者

①向こう三軒で日常的に見守っているか（誰と誰かを丁寧に調べる）。

②本人も見守られ努力をしているか。

③一人暮らし同士が見守り合っているか。

④子供が隣人宅を訪れて見守りをお願いしているか。

⑤困り事の解決も支援しているか。

⑥要援護になったため息子に引きとられた人は？　そこでどういう生活を？　もしかして即入所？

⑵引きこもりの人

①本人が見込んだ人はいないか（１人か２人はいるはず）。見つかるまで粘ろう。

②こだわっていること（趣味、得意なこと）はないか（そこから接触できる）。

⑶高齢者のみの世帯

①子どもが近居していないか（隣のご近所や隣町とか）。

②夫が要介護の妻を介護していないか（孤立や虐待が心配）。

③夫が（または夫婦一緒に）地域デビューしていないか。

⑷要介護の母と息子の二人暮らし

①息子の負担がきつくないか。息子の仕事は？

②ネグレクト（介護放棄）は？　虐待は？

⑸施設入所者

①里帰りができているか。自宅だけでなく地域のサロンや趣味グループにも。

②夫婦別々の施設に入れられていないか、または妻だけ入所で夫のストレスは？

③本人が世話焼きさんだった場合、入所したため地域が困ったケースはないか。

⑹デイサービス利用者

①本人の意向に反して利用させられていないか。

②地域のサロン等に受け入れられているか。

③デイサービス利用の結果、本人の生きがいが阻まれてはいないか。

⑺在宅の要介護者

①ケアマネやヘルパーが枠外のニーズをご近所にお願いしていないか。

②ご近所の介護者同士が助け合っていないか。

③ご近所の元看護師などが介護者の相談に応じていないか。

④要介護者を地域活動やサロンに参加させていないか。

⑤まだ要介護ではないのに、楽しみ事をやめさせられてしまった人は？

⑻認知症の人

①一人暮らしで認知症の場合、本人の意向に反して施設入所させられていないか。

②散歩ルートは確認したか。接点で見守っている人や立ち寄りの店はあるか。

③認知症をオープンにしている家族はあるか。オープンになっているご近所か。

④認知症の人をサロンや老人クラブに受け入れているか。

⑤家族が周りに協力を求めているか。

⑼障害児者

①ご近所の人と交流ができているか。ふれあいの輪に加えられているか。

②本人の能力開発で周りが協力しているか。

③子ども会や青年団、消防団、婦人会などのグループにうけいれられているか。

⑽「迷惑な市民」（ゴミ屋敷・暴言・騒音・借金をする人など）

①その人の迷惑を甘受する（理解をもって受け入れる）ご近所か。

②本人の（抱えている）生活課題に関わっている人はいるか。

③その人が受け入れる（見込んだ）隣人はいるか。

④本人がこだわっている対象（趣味等）はあるか。そこから接触している人は？

12.当事者は地域で豊かに生きているか？

要介護者が施設に入所したり、ヘルパーを受け入れると、「一件落着」とみなされるようですが、福祉が目指すのは、要介護になっても地域で豊かに暮らせることなのです。

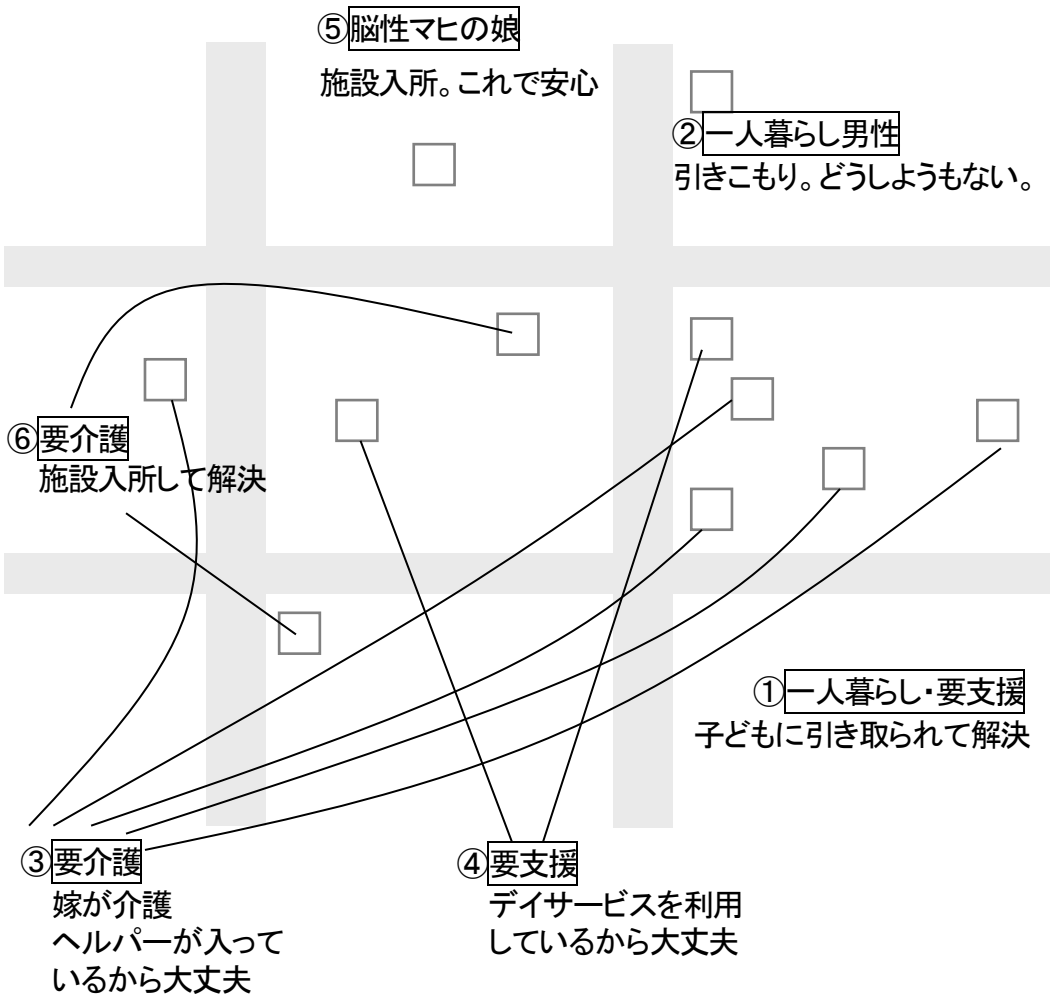
しかし今の福祉機関は、これにはあまり強い関心を持っているとは言えません。

⑴本人は要介護でも地域で豊かに生きたいと願っている

要介護者本人は、地域で心豊かに生きたいと願っているのです。本人のそうした意向を無視して施設入所なりサービス利用が行われないこと、または、入所しても里帰りができたり、地域の趣味グループやふれあいの輪に迎え入れてあげることが大切です。

⑵こう考えたら「課題」は出て来ない

下のマップは、それぞれの要介護者について、こう考えたら、いずれも「問題なし」となり、取り組み課題が出てこなくなるということを示しています。



⑶要介護者を豊かさダイアグラムに乗せてみたら…

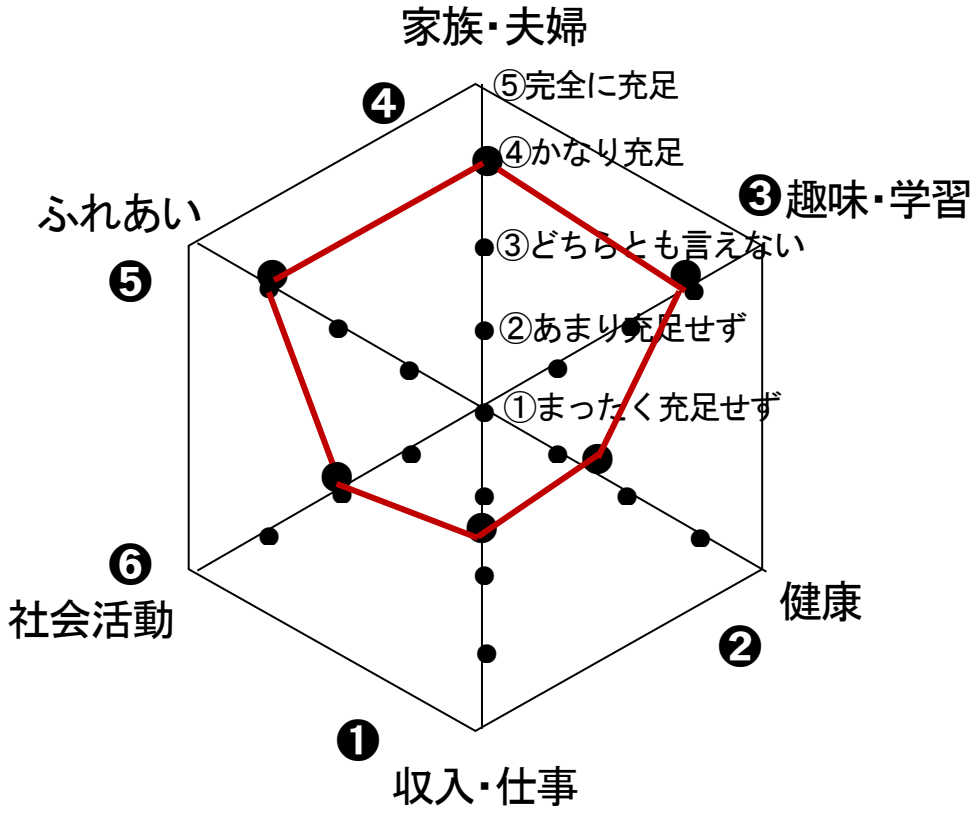
本人の生活状況を点検するためのダイアグラムで本人の豊かさを考えてみましょう。例えば、８４歳で認知症の一人暮らし女性について、マップ作りの場で、住民に聞いてみました。

❹家族はどうか？ 妹が近くに住んでいて、毎日、通って来ている。娘も週に１回は来る。❸何か楽しみはないのか。はじめは「ない」と言いましたが、「畑は持っていないのか？」と聞いたら、自分の畑に毎日行っていることがわかりました。これも立派な趣味です。

❺ふれあいはどうか。畑友だちが３人いました。

❻何か人の役に立っていることは？ 彼女はおしんこ作りがうまいという。ならばそれを皆におすそわけすればいい。

❶おしんこを売ったり、作り方を教えて、おこづかい程度の収入になればいい―というように、今の本人の生活スタイルを生かして、より豊かに生きられる方法を考えていけばいいのです。



13.ご近所福祉を誰が支援する？

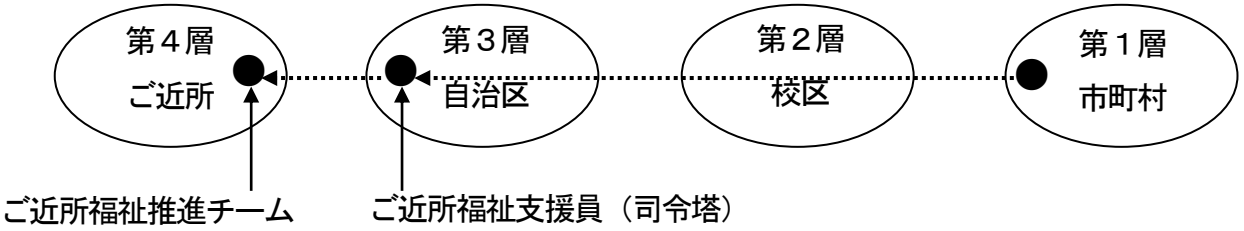
ここではご近所福祉の推進体制と支援体制のあり方を考えます。ご近所流の福祉はシステム化に向きませんが、最低限の体制づくりはする必要があります。

⑴ご近所福祉はご近所さん有志で

まずご近所福祉の実践は、ご近所内の有志で担ってもらいます。既に述べたように、この圏域は天性主義で、実際に天性の資質の持ち主が活躍しています。そのことはマップ作りをすればよくわかります。大まかに言えば、まず向こう三軒では、当事者同士が助け合っているし、大中小世話焼きさんが、柔らかく連携して、足元の要援護者を支援しています。一見バラバラに動いているようで、水面下でネットを組んでいるのです。

⑵第３層で民生委員などが司令塔役（ミッドフィルダー）

世話焼きさんがいくら優れていると言っても、彼等だけでは福祉はできません。どうしても支援者が必要です。支援者にふさわしいのは、第４層に最も近い第３層の関係者で、しかも始終ご近所を訪れ、要援護者や世話焼きさんと接触している人です。この条件に合うのはまず民生委員で、世話焼きさんを通して要援護者に関われば民生委員の負担も減りますが、支援役として動けることが条件になります。民生委員に限らず、とにかく第３層の人材で、上記の要件に合致した人が、後ろからバックアップしてくれればいいのです。それ以上の２層や１層からはご近所は遠すぎて、関与できません。



⑶第３層には超大型世話焼きさんもいる

マップ作りをしていると、第３層で活動する超大型世話焼きさんが見つかることがあります。ご近所で活動する世話焼きさんは直接、要援護者に関わるのですが、超大型世話焼きさんは、他の人を上手に活用したり、人々をまとめたりすることもできるので、この人材が見つかれば、司令塔に最適です。

14.あなたの福祉観が問われる

「気になる人」を探す場合、だれがどのように気になるのかは、人それぞれです。そこにお互いの福祉観が関係しているのです。このことを頭に入れておきましょう。マップ作りの場でこういう議論をすることはないのですが、本当は極めて重要なことです。

⑴あなたにとって「気になる人」とは？

例えば、一人暮らしをしていたが要介護気味になったので、息子さんに引き取られていった、という事例がマップで出てきたとき、あなたはこれをどう判断するか。「よかったですね」と評価する人がいる一方で、「お母さんはそれで本当にいいのですか？」と疑問を持つ人もいます。

そういう場合、子どもに引き取られたお母さんは、その後どうしているか調べてみるといいでしょう。結局、老人ホームに入所してしまったというケースもよくあるのです。

⑵マップはあなたの福祉観の表れ。皆それぞれ違う

マップを作る時、皆さんはお互いの福祉観がどうなのか、どう違うのかを確認する必要があると考えたことはないでしょう。しかし本当なら、気になる事例が出てきた時に、マップ作りの参加者で、お互いの福祉観を確認し合う必要があるのです。

気になる要介護者が見つかった時に、「地域包括センターに手渡そう」というのも１つの福祉観である一方で、「いや、本人はプロのサービスを受けるのは嫌がっているのだから、本人の希望する方向で対策を考えようではないか」という福祉観もあるのです。

⑶探したい人がいなければ、気になる人は見つからない

マップを作る際に、自分はどんな人を「気になる人」として探したいのかを、はっきりさせておくことが重要です。それが頭の中に入っていなければ、マップを広げても、何も見つかりません。

たとえば、①自分はこういう福祉観を持っている、②福祉とはどんなに要介護でも自分らしく生きていけるようにすることだ、だから③今日は要介護者がどういう願いを持っているのかを確認しよう、そして④その願いがどのように実現しているのか、いないのかを確かめてみよう、というようにマップ作りに際して頭の中で決めておけば、そういうことに関係した事実がマップから浮かび上がってくるのです。

頭の中に何もないままにマップ作りに臨むと、結局、何も出てこないでしょう。「取り立てて問題のある人はいない」とか「一人暮らし高齢者が多いことに気が付いた」程度の成果しか出てこないのです。

マップ作りは、受け身の姿勢では駄目なのです。

15.マップ作りの着地点はどこ？

マップ作りに取り掛かる時は、あまり考えない人が多いようですが、はじめにマップ作りの最終目標はどこなのかを考えておく必要はあります。これをはっきりさせないままにマップ作りに取り組んだため、一度か二度、住民と一緒にマップ作りはしたけれど、その後は放置したまま、というケースが圧倒的に多いのです。

⑴誰がマップ作りに取り組むのか、まではいいとして

①社会福祉協議会として、試験的に特定のご近所でマップ作りをしてみたが、なんだか難しそうなので、その後はうやむやになっている。
②社会福祉協議会の事業の一環として自治会や民生委員を集めてマップ作りセミナーを開いた。あとはそれぞれの自治会や民生委員がこれに取り組むかどうかは、彼らに任せてある。
③社会福祉協議会として、モデルご近所を選定してマップ作りをしてもらい、出てきた課題に取り組んでもらっているが、何か所かを実施してみたが、その後どうしたらいいかはっきりしない。
④複数の自治会や民生委員協議会などの有志がマップ作りに取り組んでいる。一年に一度は更新するようになったが、まだ課題に取り組むまでは進んでいない。

⑵すべてのご近所でマップ作りをやるつもりか？

マップ作りには守られなければならないことがあります。①およそ５０世帯程度の中で、②そのご近所さん中心にマップを作り、③出てきた課題をそのご近所さんたちで取り組んでもらう。むろんこういう方法でなければならないということではありません。ただ私たちが推奨しているのはこの方法です。

①人々はこの小さな圏域で助け合っている。だから、助け合いはこの中で行われればベスト。②ご近所のことをよく知っているのはご近所さん、特に世話焼きさんだから、彼らを中心に作ってもらう。③出てきた課題を実践するのは、もともとはご近所さんたちの助け合いを応援しようという処から始ったものだし、だから出てきた課題もご近所さんにやってもらう、というわけです。

ただし、これを実施に移すとなれば大変です。人口三万人の市町村では、ご近所は 300 あります。このすべてのご近所での福祉活動を社会福祉協議会は応援しなければなりません。だから自治会や民生委員などを総動員する必要があるのです。着地点を考えるというのは、そこまでを考えておくということなのです

16.マップで「ご近所を設計」する

取り組み課題の抽出で、いくつか箇条書きにして提示するだけでもいいのですが、ご近所作りの設計図を提示するのはどうか。

事例①サロンを中心とした町内福祉づくり

⑴この地域はこうつくればいいというヒントが浮かび上がる

マップを作っていると、この地域はこのようにつくっていけばいいというヒントが出てきます。その地域の住民の営みから見えてくるのです。

⑵取り上げたのは約 140 世帯。まずはサロンのことから聴取

次のマップは 140 世帯。第３層で、マップづくりの参加者がみんなサロンのリーダーだと聞いたので、サロンのことから聞いていくことにしました。

①サロンが「町内の集会」と言っていいほど

確かに参加者は多い。なぜこんなに多いのか。

❶リーダーたちが各地区の世話焼きさんらしい。

❷毎回、リーダーたちが各戸を廻って、お誘いのチラシをポストに入れていく。チラシの配布対象は、すべての住民。顔を合わせれば、お誘いの一言も加える。

②デイサービスの利用者も 6 人のうち 5 人がサロンに参加

第１番目の質問は、「デイサービスを利用している人も受け入れているか？」。結果は、６人の利用者のうち５人がサロンに来ていました。デイとサロンが重なった日は、サロンを優先する人もいました。

③一人暮らし高齢者は１７人のうち７人がサロンに参加

次は、「一人暮らし高齢者はどれぐらい参加しているか？」。一人暮らし高齢者１７人のうち、サロンに参加しているのは７人。

④助けられ上手の一人暮らし高齢者を見つけた

サロン参加の印である●と、一人暮らしの印である▲が重なった家を確認していったら、助けられ上手が２人見つかりました。

…サロン参加者

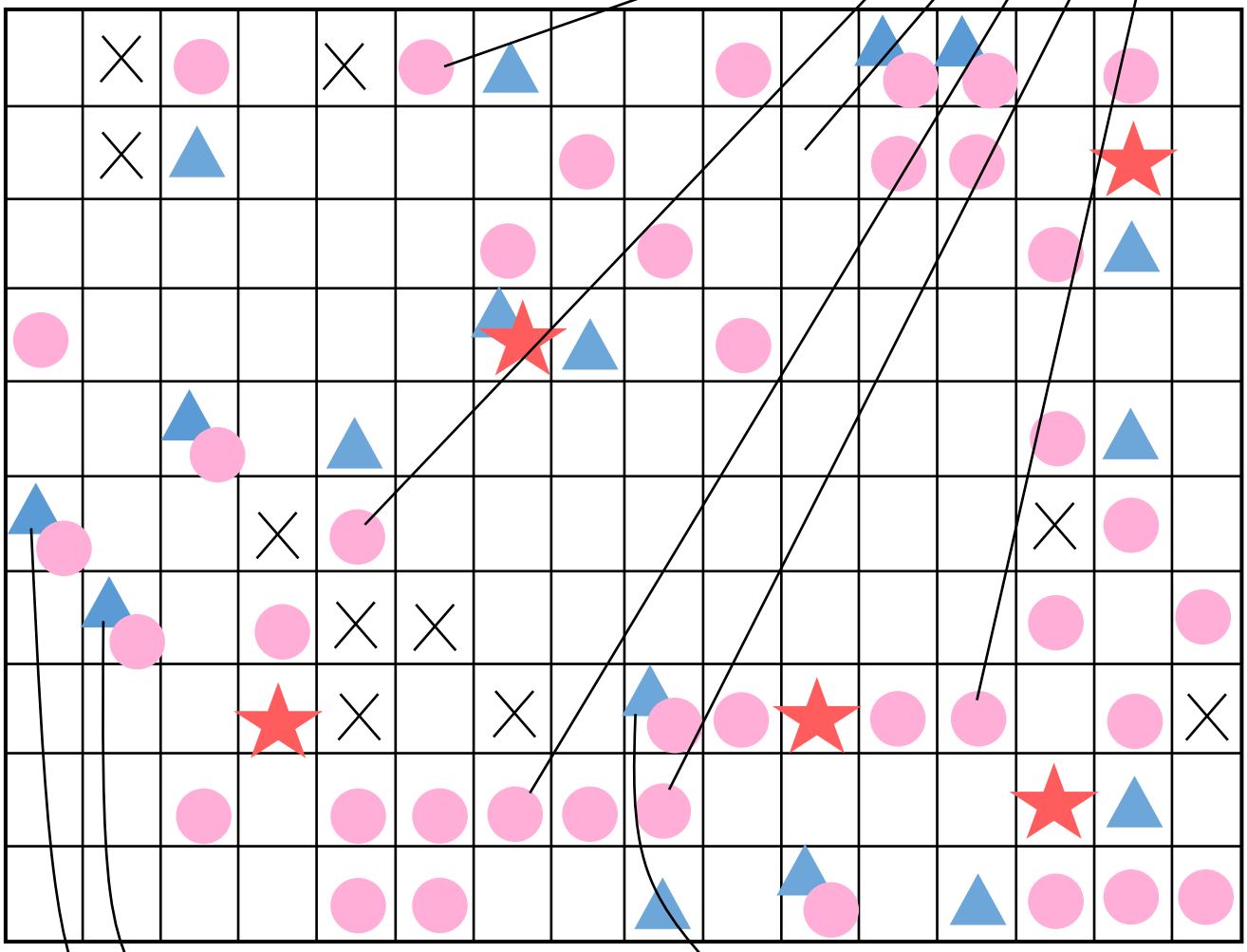
リーダーが積極的に活動することで、多くの人が参加している

①全戸にお誘いのチラシをポスティング。声かけ

②コロナ禍で開催できない今は「おたより」を作って配布

デイ利用者６人中５人がサロンに参加

デイサービス



道で会うと「見つけた！」と寄って来る

息子がご近所に挨拶している

相談の電話をしてくる

助けられ上手さん

…サロンリーダー（世話焼きさん）

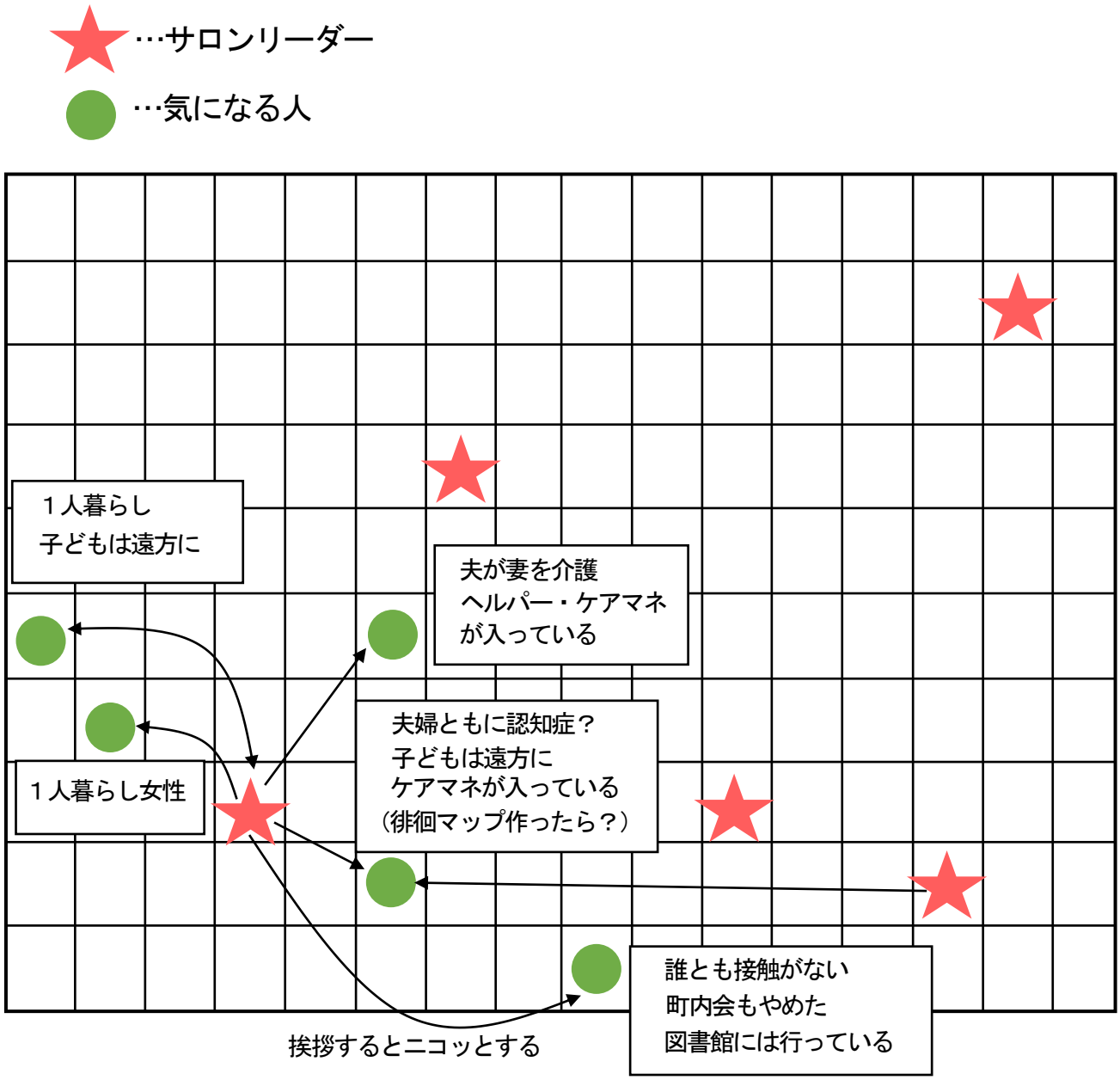
①彼らでご近所福祉推進チーム。エリアごとに分担。

②大体まんべんなく分布している

③足元の要援護者に関わっている（主に見守り）

…一人暮らし

１７人中７人がサロンに参加



⑤一人暮らし高齢者の息子がご近所さんに挨拶に来ていた

「一人暮らし高齢者の子どもがご近所さんに挨拶に来ていませんか？」と聞くと、この地区では２人見つかりました。

⑥マップ作りで質問しきれなかったことは、以下の通り

❶参加者は、自宅に戻ってから、近くの仲間と二次会を開いていないか。

❷二次会にはだれとだれが参加しているか。その中に、一次会に参加していない人はいるか。

❸この地区は人の出入りが激しいそうだが、新しく越してきた人たちもサロンに参加すれば、地元の人たちと早く知り合いになれそうだが、実際に参加しているか。

❹一人暮らし同士で助け合っているのは、どの人とどの人か？

⑵「気になる人」には誰が関わっている？

①気になる人は足元の世話焼きさんが見守っていた

大抵は、近くの世話焼きさん（サロンのリーダー）が、さりげなく見守っていました。

②ヘルパーやケアマネジャーと住民の協働はできないか？

気になる人への関わりについて住民と議論していると、そういう家には、ヘルパーやケアマネジャーが入っていることがわかります。ヘルパーやケアマネは、その要介護者のニーズの中に、自分たちでは対応できないことがあるはずです。それをご近所の住民に相談できないのか、ということです。

③世話焼きさん宅の周りに要援護者が集中している！

偶然でしょうが、１人の世話焼きさんの家の周りになぜか「気になる人」が集中しています。その結果、彼女から複数の見守りの線が出ています。

④世話焼きさんのいない地区に「出向」してもらったら？

力のある世話焼きさんにお願いして、世話焼きさんのいない地区に出向してもらう（もちろん手当付きです）ということもありえます。実際に「出向」らしきことを敢行した世話焼きさんは、新しい地区でもたちまちネットワークを構築してしまいました。

⑤災害支援用に、向こう三軒版の支え合いマップ作りを

このマップでは、気になる人には、世話焼きさんから見守りの線が出ているのですが、もしかしたらもっとたくさんの線がその家に入っているかもしれません。関わりの線というものは、外からはよく見えません。その家のすぐ近くにまで行けば見えてくるのです。

サロンにはたくさんの人が来ているのですから、その人たちが向こう三軒ごとに集まって、だれがだれに関わっているのか確認し合うというのはどうか。これができれば、災害時の避難支援の役割のあり方が見えてくるかもしれません。

⑶ご近所の福祉推進体制は？

マップ作りの結果を踏まえて、このご近所の福祉推進体制づくりを考えましょう。

①サロンの世話焼きさんたちでご近所福祉推進チームづくり

この地区では、世話焼きさん５人でご近所福祉推進体制をつくるということが考えられます。推進会議は、サロンが終わった後、同じ会場でできます。

②推進チームが担うことは？

推進チームが当面担うべきことは、以下の通りです。サロンをフルに活用していく必要があります。

❶デイサービスの利用者で、まだサロンに参加していない人を誘う。
❷一人暮らし高齢者もまだ多数の人が参加していない。
❸施設入所者も里帰りを果たしていない。家ではなく、サロンへ里帰りするという方法もある。
❹サロンとは別に、二次会を誰かの自宅でひらく方法も考える。要援護者宅での「押し掛けサロン」もいい。とにかくまず二次会の開催状況を調べよう。
❺ただサロンに参加するだけでなく、一人ぐらし同士の見守り合い、助け合いなども進めていく。
❻気になる人について、ケアマネジャーやヘルパーらと協議することも、進めていく。
❼当事者の側も担うべきことがある。助けられ上手・見守られ上手で、２つの実践が見えてきた。１つは、本人が主体的に助け手を探し、上手に助けてもらう。「助けられ実践発表会」をサロンの中で開こう。
❽もう１つは、一人暮らしの親をときどき訪ねてくる息子が、親のことを気にかけてくれる隣人に挨拶をしているケースが２つあった。これも広げていこう。
❾この地区は出入りが激しいという。班内の誰かが引っ越していき、誰かが引っ越してくる。新しい住民を早く地域に根付かせるために、サロンか班で何か企画したらどうか。
❿災害に備えて、まずは各班内での要援護者への関わりや班内のふれあい実態を調べる。

事例②限界集落と消滅集落が隣り合う地区

こちらは、限界集落と消滅集落が隣り合う地区。マップの右側が消滅集落。空き家ばかりで、住民は少ししか住んでいない。目立つのは、空き家と、未婚の男性。マップの左側は、限界集落。まだ人は住んでいるが、少しずつ限界に近付いている。しかし人々のふれあいは盛んで、畑と公民館のサロンには、多くの人が集まっている。

ただ、気になるのが、右側の人たちの参加の少なさだ。

⑴まちづくりの目標

限界集落から消滅寸前の集落へ。それでも希望を捨てない集落作り。

⑵スローガン

この地区に縁のある人はみんな「わが住民」だ

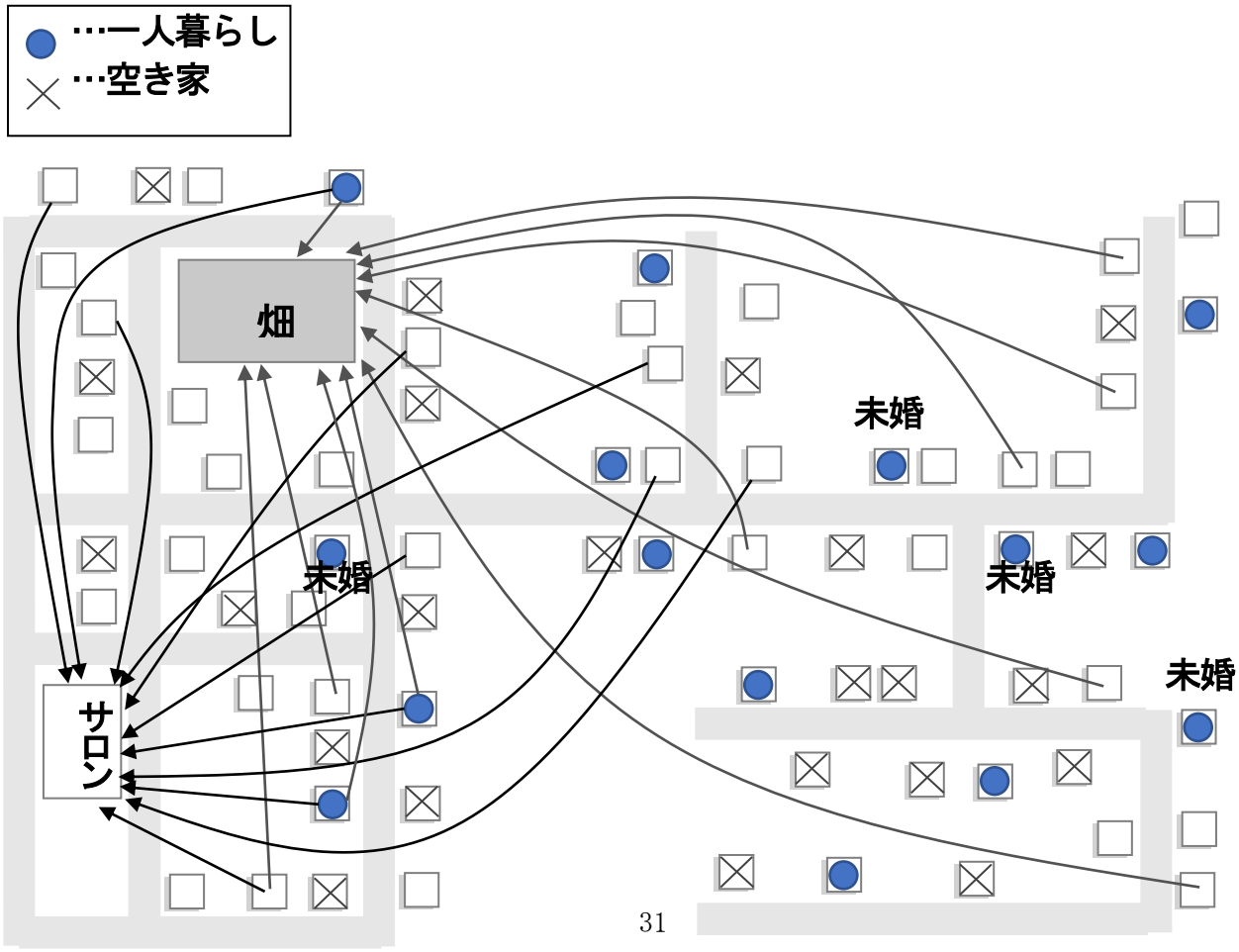
①身内とよそ者の区分けをやめる。
②全日制住民と定時制住民。ときどき来る人も「住民」だ。
③離れて住んでいても、イベントには来る人も住民だ。
④空き家の持ち主、施設入所者、親がここに住んでいる子ども、檀家がここにある家、
イベントの時に来てくれる人。みんな「住民」だ。
⑤何かをするときは、その人たちも誘う。

⑶取り組み課題

⑴お寺の活用
⑵サロンや畑に住民のさらなる参加を呼びかける
⑶右半分の地区でもサロンや畑づくりを
⑷要介護者もサロンや農園へ参加できるよう呼びかけ
⑸施設入所者の里帰りを
⑹夫婦別々の施設への入所を改められないか
⑺空き家の管理を住民の手で
⑻一人暮らしの親元にときどき通ってくる子ども同士の交流
⑼たった２人のための子ども祭りを
⑽ゴミ出しに苦労している人がいる

⑷取り組み課題がめざすもの

⑴少ない子どもをみんなで大事にする集落
⑵他地区の若者も、来てみたい集落
⑶地区を去った人も、また戻りたくなる集落
⑷１人になっても寂しくない集落
⑸要援護になっても豊かな生活ができる集落
⑹困り事もみんなの助け合いで解決する集落
⑺男性のための憩いの場を用意する集落



17.取り組み課題の整理

誰もが安全にその人らしく生きていける地域づくりへの問題と取り組み方策

⑴「気になる要援護者」－１人ひとりの取り組み課題

■個々の「気になる要援護者」の課題と対応策

＜見守り、困り事への対応、介護・ケア、豊かな生活支援＞

⑴＿＿＿＿＿＿さんへの対応

①問題

②解決の手がかり・ヒント

③解決策

⑵ご近所内の「気になる問題」への取り組み課題

❶「気になる要援護者」の共通課題と解決策

＜見守り、困り事への対応、介護・ケア、豊かな生活支援＞

❷住民の生活課題と解決策

＜買い物・通院が不便、交通事故の危険、若者不足で行事ができない＞⑹

❸「ふれあい、助け合いのご近所づくり」の課題と解決策

＜住民の交流がない、世話焼きさん等の人材不足、障害や病気を隠す風潮、
当事者の自助力不足、住民と関係機関・民生委員等の連携不足＞

⑴＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿の問題

①問題

②解決の手がかり・ヒント

③解決策

住民流福祉総合研究所
木原孝久

〒350-0451
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷１４７６－１
℡049-294-8284
kiharas@msh.biglobe.ne.jp
http://juminryu.web.fc2.com/